

# 2018年 第1回 日本大学三軒茶屋キャンパスヨーロッパ研修報告書 2018 1st Nihon University Sangenjaya Campus Europe Training Report

山 本 大\*  
Dai Yamamoto

日本大学スポーツ科学部  
College of Sports Sciences, Nihon University

キーワード：ヨーロッパ・スポーツ・研修  
Keywords : Europe・Sports・Training

## 1. はじめに

本報告書は、第1回目の日本大学三軒茶屋キャンパスが実施した15日間のヨーロッパ研修の体験をまとめたものである。研修の目的は、学生が実際に海外に赴き、現地で様々な体験をすることで文化活動に関する知見を広めることである。

現代はグローバル化の時代と言われ、多くの人々が国境を越え行き交う時代となっている。そのような時代に、これから社会人となる学生たちも、英語を中心とした他言語を扱い、異文化で育った外国人と仕事や生活でコミュニケーションをとることがもはや避けては通れなくなりつつある。本学部でもこうした実情を踏まえ、学生たちの将来を見据えたプログラムの実施を検討してきた。“Travel broadens mind. (旅は知性を広める)”ということわざの通り、直接異文化を体験することは間接的に見聞きするよりも効果的である。そこで我々は、スイス・フランス・ドイツ・オランダの4カ国を訪問し、各国のスポーツおよび文化活動を見学・体験するとともに、その国で暮らす人々の生活や習慣を知ることがを目的として海外研修を実施した。

## 2. 概要

### 2.1 期間

2018年9月8日(土)~9月22日(土)  
全15日間

### 2.2 訪問地

スイス、フランス、ドイツ、オランダ

### 2.3 参加者

学生34名(男子25名、女子9名)、引率教職員2名、ツアーガイド1名



写真1 出発前成田空港にて

## 3. スイス

### 3.1 ローザンヌ大学

1537年に神学校として創立、1890年に大学

\* 日本大学スポーツ科学部競技スポーツ学科 (〒154-8513 東京都世田谷区下馬3-34-1)  
College of sports sciences, Nihon University (3-34-1 Shimouma, Setagaya-ku, Tokyo 154-8513, Japan)

となった歴史をもつローザンヌ大学(University of Lausanne)は、スイス連邦工科大学も隣接するローザンヌ西部郊外のレマン湖のほとりに位置しており、187の国籍を持つ15,300人の学生が学び、3,000人の研究者と職員が働いている。そのローザンヌ大学の敷地内に、スポーツマネジメントを専門とする大学院の国際スポーツ科学技術アカデミー(International Academy of Sports Science and Technology, 以下AISTS)はある。ここでの講義はAISTS 管理局長を務めているPerrot氏(Madame Caroline Perrot)が担当した。

AISTSは、スポーツイベント、国際的なスポーツの管理と運営、そして社会的および経済的影響を与えるスポーツの開発の分野で世界クラスの教育プログラムの提供を目的に、2000年に国際織ピック委員会(IOC)とローザンヌ大学、スイス工科大学ローザンヌ校、ジュネーブ大学、IMDビジネススクール、ローザンヌホテル学校、そしてローザンヌ市とヴォー州によって設立された非営利団体の教育機関である。AISTSは、その教育プログラムを通じて、毎年ローザンヌで開催されるスポーツアドミニストレーションおよびテクノロジープログラムで国際的に高い評価を得ている修士課程(MAS)で、将来の国際スポーツリーダーを育成することを目指している。またこのプログラムは、国際的なスポーツ組織に専門的能力開発の機会を提供し、主要なイベント主催者にオンサイトトレーニング(依頼人ごとの個別開催研修)も提供している。AISTSは、継続的な「教育」・応用「研究」・そして業界との「つながり」の3つを柱とし、双方向で魅力的な基盤の提供という中核的な活動分野を通じて、スポーツのプロフェッショナルな管理に取り組んでいる。ここで学んだ学生は、卒業後、国際オリンピック委員会や国際サッカー連盟など各競技の国際連盟、そしてサッカー・バスケットボールのプロスポーツクラブやアディダス・ナイキといったスポーツメーカーに誘われて就職するとのことである。

AISTSでは、日本人の留学生がこれまで5人

が修了しており、現在、1人現役学生として学んでいる。その現役学生の堀毛翔太氏から話を伺う機会を得た。堀毛氏は、日本の商社勤務の後、スポーツに関わる仕事がしたいと一念発起し、2017年からAISTSで学んでいる。現在は、IOCのスポンサーシップのレギュレーションをテーマに研究を進めている。堀家氏からの「働く場を日本だけでなく海外にも広げよう」という話に、学生たちから質問が相次ぎ、当初の予定時間を30分以上オーバーするほどの活発な交流となった。また、Perrot氏が、「あなたたちの研修のグループに4分の1しか女性がないのと同じで、スポーツ界で働く女性が少ない。女性の数をもっと増やすことは課題の1つ」と語っていたのが印象的だった。ちなみにAISTSでは働いている人数は、女性の方が多いとのことである。



写真2 AISTSでの講義に耳を傾ける学生達

### 3.2 スポーツ・ヘルスセンター

続いてローザンヌ大学とスイス工科大学ローザンヌ校両校共同のスポーツ施設(CENTRE SPORT ET SANTÉ: 以下スポーツセンター)を見学した。施設の運営責任者のIneichen氏(Monsieur Reto Ineichen)が施設を案内してくれた。

スポーツセンターは約75年前から運営され、常勤30名に非常勤も合すると100人ほどのスタッフが働いており、ローザンヌ大学とスイス工科大学ローザンヌ校の学生を合わせて3万5千人が利用している。世界一の規模のスポーツ施設といわれており、120種類以上のスポーツ

が実施可能であり、学生は、ほとんど無料で施設を利用できる。スポーツセンターでは、一般学生からプロ選手やその予備軍まで、自分の能力に応じて取り組めるようにプログラムが組まれている。またレクリエーションレベルから国内チャンピオンレベルまで様々なレベルのチームがあり、個人と同様に能力に応じて活動している。



写真3 体育館見学：奥はボルダリングの壁

学生が、活動の様子をみながら「みんながスポーツを楽しんでいる。」と述べたように、スポーツはいつでも誰でも楽しむものというスタンスを垣間見ることが出来た。

### 3.3 オリンピック博物館

オリンピック博物館 (Olympic Museum) はレマン湖のほとり、ウシーという地域にある。ローザンヌは町全体が斜面にあり、1993年に開館したオリンピック博物館も湖畔から階段を上がって入口へと向かう。オリンピック博物館には年間約30万人が訪れ、3000平方メートルの館内に約3000点の展示物と150台の説明用ディスプレイ、50台のインタラクティブなモニターが設置されている。館内は3つのエリアに分かれており、最初が歴史について学べる「オリンピック・ワールド」で、ギリシャ時代のオリンピックや、近代オリンピックの父であるピエール・ド・クーベルタン男爵の紹介、各大会のトーチやマスコットなどが展示されている。次のエリアは、「オリンピック・ゲームズ」で、各年代のさまざまな種目のユニフォームや道具が

展示されており、これまでのオリンピックのさまざまな名場面を見ることができる。最後の「オリンピック・スピリット」エリアには、各大会のメダルが展示してあり、さらには競技のバーチャル体験や、表彰台にあがることなどもできる。出口には、フランス語と英語で「東京で会いましょう。」と書かれていた。



写真4 オリンピック博物館：入口

## 4. フランス

### 4.1 クレールフォンテーヌ・ナショナルフットボールセンター

クレールフォンテーヌ・ナショナルフットボールセンター (Le Centre National du Football, 通称クレールフォンテーヌまたはCNF) は、パリから南西へ車でおよそ1時間(約50km)の場所にあるフランスサッカー協会の強化育成施設である。クレールフォンテーヌは1988年にその歴史が始まった。施設建設の目的は、サッカーワールドカップ優勝であり、今でもフランスサッカー協会の心臓部として強化と育成を引き受けている。

敷地の広さは、およそ56ヘクタール(東京ドーム約12個分)で、オフィス棟、医療棟、屋外テニスコート、そして天然芝コート6面、人工芝コート2面、室内トレーニング場、シャトーと呼ばれるA代表の宿泊所、そして国立フットボール養成所(以下INF)の宿舎などが点在している。国際サッカー連盟から高評価を得ている医療棟や、芝生の下に融雪ヒーターのあるスタジアム、練習用コートを周った後、INFの宿舎を見学した。INFは13歳から15歳まで

の選抜された少年たち 25 人と 3 人のコーチが宿泊しながらトレーニングを積んでいる。毎年約 15 人がプロ契約を結んでおり、彼らのパフォーマンスはフランスサッカーの将来を担っている。続けて宿舍 A 代表のメインコートを上から眺めた。ピッチの目の前には「シャトー」(城:château)と呼ばれる A 代表が宿泊する施設がある。当初、外観のみ見学だったが、学生からの懇願に、室内見学の許可が下りた。1 か月前ロシアワールドカップで優勝したフランス代表の選手が座った場所や、各選手専用の部屋を見ることができ、学生たちも興奮気味だった。



写真 5 クレールフォンテーヌ・シャトー入口：最前列中央が通訳の小栗氏，その右がニコラ氏

#### 4.2 ACBB スポーツクラブ

ACBB スポーツクラブ (Athletic Club de Boulogne-Billancourt, 以下 ACBB) は、1943 年設立の総合型地域スポーツクラブで、バドミントンや自転車、ヨガなど 32 種目の競技が行われている。場所は、パリの高級住宅地に位置し、隣にはルノー本社がかまえている。会員数 1 万 1 千人ほどで、これまでに 27 人のオリンピック選手を輩出している。会員は年間 300 ユーロの会員費で施設を自由に使える。敷地内には、人工芝のサッカー場をはじめ、室内テニス場やフィットネスルームがあり街のクラブとは思えないほど充実していた。フランスのスポーツクラブでは、育成年代においてはサブなしの全員レギュラーという方針であり、誰もが試合経験を積めるように組織化がされている。とはいえ、都会であるパリでは、各クラブも複数チームで

参加するため、試合をおこなうための会場確保が大変だということである (通訳・小栗氏談)。

#### 4.3 オルセー美術館

駅舎を改装した建物で有名なオルセー美術館 (Musée d'Orsay) は、館内の中央が吹き抜けとなっており、ガラス張りの天井や大きな掛け時計など当時の面影を残した印象的な造りとなっている。この日はルーブル美術館も回るという強行スケジュールのため、ミレーの「落ち穂拾い」、マネの「笛を吹く少年」、ルノワールの「ムーラン・ドゥ・ラ・ギャレット」など有名作品のみを足早に見て回った。



写真 6 ACBB: サッカーコート

#### 4.4 ルーブル美術館

年間 1,000 万人が訪れる、世界一有名な美術館といっても過言ではないルーブル美術館 (Musée du Louvre) は、1 日で回ることができないといわれ、7 万 3 千平方メートル、およそ東京ドームの 1.5 倍の館内に、約 3 万 5 千点の美術品が展示されている。入館には X 線チェックもあり、オルセー美術館以上に厳重なセキュリティを通過する。夕方近くの入館にもかかわらず、中は多くの人々でごった返していた。限られた時間の中で、ミロのヴィーナスやサモトラケのニケなど有名作品を見て回ったが、ガイドの方の説明のおかげで、その作品についての背景や意味などを知ることができ、とても有意義な時間となった。

## 5. ドイツ

### 5.1 スポーツシュレ・ヘネフ

スポーツシュレ・ヘネフ (Sportschule Hennef) は、1947年に作られたケルンから南東へ車で約40分(約40km)の丘陵地にあるスポーツ合宿施設である。約60年前からサッカーの養成所として利用されており、ドイツの各年代の代表合宿や、コーチ養成のプログラムが実施されている。60ヘクタール、およそ東京ドーム13個分の敷地にはサッカー用の天然芝コート3面、人工芝コート1面、室内人工芝コート1面、人工芝のフットサルコート3面、屋外、屋内プールがある。またバスケットボールなどがおこなえる多目的ホール、ボクシングジムや柔道場などの格技場、さらにフィットネスジム、サウナなどがある屋内トレーニング施設や、森林を利用したアスレチック施設などもある。施設には114部屋に211のベッドがある宿泊施設も併設されている。施設の見学後、本館にあるレストランで昼食をとったが、陽気なウェイターと美味しい料理は、筆者が20年前に受講したコーチ養成コースの頃と変わっていなかった。



写真7 ヘネフスポーツシュレ：エントランス

### 5.2 ドイツ・スポーツとオリンピック博物館

ドイツ・スポーツとオリンピック博物館 (Deutsches Sport & Olympia Museum) は、ライン川のほとりにある。設立は1999年と新しく、ドイツサッカー協会、ケルン体育大学、ケルン市が共同で運営している。3階建ての館内は、展示物に交じり入館者が実際にシュートしたり、自転車を漕いだりと身体を動かせる設

備があることが特徴である。またドイツの体操の歴史とともに、BMXやスケートボードなどの新しいオリンピック種目について展示してある。屋上はフットサルコートになっており、学生たちはコートを借りて、久しぶりの運動を楽しんでいた。



写真8 オリンピック博物館：外観

### 5.3 ドイツで働く日本人①

講義を担当してくれた市橋隆輔氏は、ケルン体育大学卒業後、日本でいう接骨院を経営し、自らも理学療法士として働いている。ドイツ留学に至るプロセスや理学療法士を目指したきっかけなど話の最後に、「恥ずかしながら自分から話かけよう。」とコミュニケーションの大切さを話してくれた。市橋氏の話は、学生たちの心に響いたようで、その日の夜から研修先や宿泊先の方々に明るく挨拶するようになった。

### 5.4 ブンデスリーガ観戦

ブンデスリーガの観戦は、多くの学生が楽しみにしていたイベントの1つである。滞在した



写真9 ブンデスリーガ観戦

ケルンにも2部に所属する1FCケルンという古豪のクラブがあるが、チケットがソールドアウトだったため、隣町のデュッセルドルフまで足を運ぶこととなった。学生たちは、ゴール裏上部の席でビールを飲みながら大声で応援するドイツ人に圧倒されていたものの、次第に打ち解けて、ゴールが決まると一緒に喜んだり、汚いプレーにはブーイングをするなど、本場のプロサッカーの雰囲気を堪能していた。

### 5.5 講義「ゲーム分析」

「ゲーム分析」の講義は、ケルン体育大学の敷地内にある1FCケルンのホームスタジアム「ラインエネルギースタジアム(RheinEnergieStadion)」スタジアム内のVIPルームで行われた。講義を担当してくれたOtto氏(Herr Alexander Otto)は、ケルン体育大学を卒業し、ブンデスリーガのクラブやドイツ代表のアナリストとして活躍し、現在はサッカーコーチ兼アナリストとして活動している。Otto氏の講義は、2006年ドイツ・ワールドカップ準決勝、ドイツ対アルゼンチンのPK戦の映像から始まった。そこには延長戦を戦い、これからPK戦に突入する前のドイツ代表の様子が映し出されていた。その映像には、ドイツのゴールキーパーコーチが、ゴールキーパーに1枚のメモを渡しているシーンがある。これがゲーム分析の存在を印象付けるシーンとなったのはPK戦終了後のことである。当時のゴールキーパー・レーマン選手は、このPK戦で相手の蹴る方向へ全て反応していた。これはワールドカップのPK戦では、99%が得意な方



写真10 講義に耳を傾ける学生たち

へ蹴ると分析したドイツチームの分析調査の結果から得られたデータだった。このワールドカップ以降、ゲーム分析は、トップレベルの試合で勝利するために欠かすことのできない分野になってきていることを、パワーポイントの資料や問いかけなどによってわかりやすく講義を進めてくれた。

Otto氏は、最後に我々に「コンフォートゾーンから抜け出せば新しい世界が見える。」、「常に学び考え続けなければならない。」と語ってくれた。多くの質疑応答が飛び交い、学生たちにとっても有意義な講義だった。

### 5.6 ケルン体育大学

1920年にベルリンで創設されたドイツ体育大学(Deutsche Sporthochschule Köln)は、1947年にケルンに再建されたことから、ケルン体育大学(体育大学)の歴史が始まった。スポーツにおけるあらゆる分野を研究し、体育教師になる学士コースが5種類、9つの修士課程、そして博士課程があり、世界85カ国から6,000人が在籍し、約1,000人の職員や研究者が働いている。また世界で60の大学とパートナーシップを結んでいる。敷地面積はおおよそ486万2000平方メートルで、東京ドームに換算するとなんと約104個分である。広大な敷地には、天然芝のサッカー場が10面以上、テニス場や室内外の陸上トラック、自転車トラックに20以上の体育館があり、敷地内には学生寮も備えている。

学生たちは施設の充実ぶりに感嘆し、500円程度でお腹いっぱいになる学食の昼食を羨まし



写真11 ケルン体育大学室内陸上競技場

がっていた。

## 5.7 ドイツで働く日本人②

1FCケルン (1. FC Köln) のクラブハウス、通称ゲイスボックハイム (Geissbockheim) は森の中にある。1FCケルンは、1948年にケルンではじめて創立されたクラブのため名称に1がついている。会員数約5万人のケルン1のスポーツクラブで、昨年までサッカー日本代表の大迫勇也選手が所属していた。敷地内にはクラブハウスを中心に天然芝コートが4面、人工芝コートが2面、小さなスタジアムが1つある。ここでGKコーチとして働く田口哲雄氏が講師を担当してくれた。田口氏は、日本の大学を卒業後、ケルン体育大学に留学中に、知り合いのドイツ人の紹介で、1FCケルンの非常勤ゴールキーパーコーチとして働き始めた。田口氏が指導したU15 (15歳以下) のゴールキーパーが続げざまにU15ドイツ代表になった手腕を買われ、フルタイムプロコーチとして契約し、今日まで13シーズンにわたり1FCケルンのゴールキーパーコーチとして活躍している。

田口氏も、市橋氏と同じく日本人の良さについて話をしてくれた。「ともすれば自己主張のない日本人の私が、いつのまにかクラブの最古参の1人にまでなったのは、周りの考えを受け入れる姿勢があったからではないか」と自身の経験を交えて話してくれた。学生たちは、「協調できることは、我々日本人の強みだ」と熱く語る田口氏に圧倒されながらも、熱心に耳を傾けていた。



写真 12 1FCケルンの練習場内スタジアム

## 6. オランダ

### 6.1 ゴッホ美術館

ケルンから特急に乗って約2時間40分ほどでオランダ・アムステルダムに到着した。ダム広場で自由に昼食を取った後、研修最後の見学施設であるゴッホ美術館 (Van Gogh Museum) を巡った。先の美術館見学と同様、ガイドの説明によって、絵に対する鑑賞の質が高まることを実感した。

### 6.2 クライフ・インスティテュート講義

最後の講義は、オリンピックスタジアム近くにあるアムステルダム・テニスアカデミーにて行われた。テニスアカデミーは、小さく設備も最新というわけではないが、イングランドのサッカー選手の David Beckham 氏などテニスはもとよりあらゆる種目のトップアスリートが訪れる国際的なスポーツリカバリーセンターである。講義を担当する Verschuur 氏 (Mr. Henk Verschuur) は、空手の元世界チャンピオンで、1970年代に日本でも学位を取ったキャリアをもつ方であり、「このセンターは、施設よりも人材を充実させることで現在の地位を得た」と話をしながら我々を案内してくれた。

クライフ・インスティテュート (Johan Cruyff Institute) は、サッカーで世界的に有名なオランダ人、Johan Cruyff氏が設立した、スポーツマネジメントのリーダーになるためにアスリート、スポーツ、そしてビジネスのプロフェッショナルを教育する機関である。Verschuur氏は、「スポーツ界はスポーツに情熱を持っている人がリードすべきである。そのための知識と技術が必要だ。」というビジョンのもと、スポーツ選手出身者にリーダーシップ論を教えており、最近はこの理論のビジネスへの活用を目的として学びに来る人も増えていると教えてくれた。



写真 13 ヘンク氏の講義：スクワット中

ここでは「異文化マネジメント」と「危機管理」の2テーマの講義を聴講した。ただ座って話を聞くだけ・いるだけじゃないという話から始まり、ゲームや歌を挟みながら進行するユニークで楽しい講義だった。Verschuur氏が繰り返し伝えていた、協力することがチームの成功の秘訣であるということは、サッカー指導者である著者にとってもたいへん勉強になった。

### 6.3 さよならパーティ

アムステルダムのだム広場近くのレストラン「ハーシェ・クラス (Haesje Claes)」での最後の晚餐に先立ち、この研修の経験を総括する班ごとの発表会を実施した。各班は、それぞれ文化・生活面とスポーツ面に関して日本との違いや、想像していたことと実際に体験したことの違いについて発表した。各班の発表は、全員の投票結果で引率の教職員で用意したプレゼントがもらえることもあり、大いに盛り上がった。発表会の後は、14日間の研修で親睦を深めた参



写真 14 さよならパーティ：発表会の様子

加者同士で和気あいあいと最後の食事を楽しんだ。

### 7. おわりに

15日間の研修が、大きなけがや病気、トラブルもなく無事に終わったことは何よりである。初回ということもあり、出発前は参加する学生が楽しめるかどうかなど不安な面もあったが、帰国に名残惜しむ学生達の様子から、本研修がおおむね成功した実感した。次回は、今回の経験を活かして、さらに良い研修を目指したい。